
IXA フクシュウキ

ブレイジェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IXA フクシユウキ

【Nコード】

N8320U

【作者名】

ブレイジェル

【あらすじ】

とある高校で一人の男子高校生が殺された。
その高校生は全ての人間から拒絶されながら殺された。
しかしその者は仮面ライダーとしてこの世に舞い戻る。
そして復讐鬼と化した。

（前書き）

初投稿です。予定通りにできましたが、（短編なのに）二つに分けます。

もしかしたら文字表現などがおかしい部分などがあるかもしれませんが。

ちなみにこの作品は人間の残酷さ。そして後半多くのグロが含まれているので注意してください。

普通の都会にある高校があった。

高校の名は第七麻奈森高校だいなまなもりじゅう

成績もまあまあでごく普通の生徒が通う都立高校だ。

いや普通ではなかった。

なぜなら・・・

今の時刻は午後2時半。第七麻奈森高校では今は休み時間だ。だが3年B組の教室では休み時間とは思えないほどの景色だった。

校庭に遊びに行っている人は少なく36人中30人位が教室に残っていた。

その中で8人の男子生徒達が一人の男子生徒を囲んでいた。囲んでいたその中の一人が出てきて自分達が囲んでる1人男子生徒の前に立った。身長は176cm位で顔は超がついていいほどイケメンだ。しかしその他の7人はとても顔立ちが悪く、囲んでいる1人の男子生徒の顔をニヤニヤしながら見つめている。

「ねえ、早く君のお金。僕達に渡してよ。」

イケメンな生徒柿沼裕也かきめまゆつやは自分たちが囲んでいる男子生徒神田零かんだれいに言った。

神田は身長は160cmほど顔も悪くはない感じた。

「い、いやだ・・・これは・・・」

ドゴッ

まだ何か言おうとした神田に柿沼は腹に蹴りを入れた。

「どうして？君がお金なんか持ってたって意味ないじゃん。」

神田はその場に倒れ、苦しそうに腹を抱える。それを見て微笑みながら柿沼は話しを続ける。

「大体お金っていうのはね、この世に生きている価値がある人が持つんだよ。そうでしょみんな？」

柿沼は、教室内に残っている生徒達に問いかける。

「はははっ！まったく柿沼の言う通りだ！」

「神田は生きている意味はねえや！」

神田を囲んでいる男子7人が口々に柿沼の問いかけに賛同する。

残っている他の生徒の中にはクスクスと笑っている生徒がほとんどだった。

「そうそう！みんなそうだよね！神田君。君は頭も悪いし、運動なんか全然できないじゃないか。無能じゃないか。つまり生きている価値がないってことだよ。」

柿沼は、とても頭が良く、運動もできる。簡単に言っているとパーフェクトな人間だ。

それに対して神田は柿沼の言つとおり頭も悪く、運動も全くできない。

「う、うる、うるさい。」

神田は消えそうな声で柿沼に言う。

それに対し、

「あれれれれ？生きている価値の無いゴミがなんか言ってるよ。なんて言っているのかな？」

そう言いながら倒れている神田に柿沼は再び蹴りをいれる。そして、他の一人が神田のズボンのポケットから無理やり財布を抜き出す。

「うつひょー。こいつ3千円もあるぜ。」

財布を抜きだした男子が言う。

「ゴミが持つてるのはもったいないぐらいの金額だな。」

他の男子も言う。

「でも少なくなったねー。前は4千あったよ。どうして少なくなったのかな？」

柿沼が神田に問いかける。そう・・・柿沼と他の男子はこの行為を毎日のように繰り返していた。そのたびに神田は金を取られ、殴られ、蹴られ、の繰り返しだった。そのたびに神田は学校に持つてくる金を

少なくしてきた。だが、金を取られるのには変わりなかった。

「まあいいや。これ以上いろいろしてもまた明日やれば。」

そう言ったと同時にチャイムが鳴り担任の男性教師が教室に入ってきた。教師はぼろぼろになっている神田とそれをやった柿沼達を見た。だが・・・

「ほら早く座れ。授業がはじまるぞ。」

あり得ない・・・いやあつてはならない一言だった。実は柿沼の父親、柿沼聡はとても有名な政治家。だが、息子に何かした教師や他の大人を裏ルートでその人間がやっている仕事をやめさせるという最悪な政治家だった。それを他の教師、大人たちは知っているため柿沼裕也になにも手を出さないのだ。

「はい。わかりました。」

柿沼は何事もなかったかのように笑顔で自分の席に戻った。他の男子7人も自分の席に戻る。だが神田は自分の席に戻らない・・・・・・いや戻れないのだ。まだ倒れている神田に教師はなんと・・・

「神田！早く自分の席に座れ！私の言うことが聞けないのか！」

そう言ったかと思うと倒れている神田の胸倉を掴み思いつきり殴った。これはどういふことかという、柿沼は第七麻奈森高校の教師全員を多額の金で買収。そして神田に精神的、肉体的なダメージを与えるように命令したのだ。もちろん教師達は逆らうことなく柿沼の命令にしたがった。

柿沼裕也は、表ではとてもやさしく、近所からも評判のいい高校生だが、だが裏は甘やかされて育ったため、

残酷で、

卑劣で、

心が腐りきっている、

人間の皮をかぶった悪魔だ・・・。

神田は何も言うこともなく自分の体を無理やり起こしフラフラと自分の席に座った。

そう・・・。これが第七麻奈森高校の現状だった・・・。

そんな地獄の高校が終わり神田は帰りに通る川の側を歩いていた。

（どうして僕だけ……。どうして僕ばかり不幸なの？）

そう思いながら……。

柿沼に蹴られたところや、教師に殴られたところはいつもの事なのでもう痛くはなくなっていた。

だが心の傷は癒えなかった……。

神田は一か月前、家族を全員交通事故で亡くしていた。零も一緒に巻き込まれたのだが、命は取り留めた。そして柿沼達の壮絶ないじめ。精神は限界だった。

「神田君。」

そう言って神田に声をかける者がいた。神田は声のする方に振り向いた。

「……またやられたのか。」

声をかけた男、そうやまかすよし 莊山一義は殴られて痣ができている神田の顔を見ていった。

歳は30代半ばぐらい。黒いスーツを着ている。

莊山一義は、しらかわ 白川 警察署の強行犯係4班に勤務している。神田の家族が亡くなったときは交通事故の捜査をするところに勤務していた。神田の家族が亡くなった事故を捜査しているときに神田と出会い、それ以来帰り道などでよく出会うので莊山はそのたびに神田に声をかけていた。

「……。」

「まあ、座れよ。」

莊山は、神田を近くのベンチに座らせた。

「すまないな……柿沼直哉と柿沼聡の件は今も捜査禁止になっているんだ。」

莊山は神田に言った。柿沼聡は警察にも手をまわしており捜査を禁止にさせていた。

「謝らないでください。莊山さんはなににも悪いことはしてません」

家族も、友達もない神田には莊山だけが唯一の話し相手、そして味方だ。

「生きている価値がないと言われましたよ。でも、もしかしたたらそうなのかもしれません。」

神田が今日あった出来事^{いじめ}について話す。

「何を言っているんだ！生きている価値がない人間なんて世界中どこを探したって何処にもいないぞ！」

莊山は少し強い口調で言った。

「いいか神田君。君は、毎日のように続けられるいじめにも耐えて、学校にだってちゃんと行っている。普通の少年だったら不登校や、

もしくは自殺に行きついていいるだろう。だから、君はとても強い人間だ。希望を失わずにがんばるんだ。」

莊山は神田に言い聞かせた。

「だからこそ俺は、必ず柿沼親子の全貌を暴いてやる。だから、それまで・・・辛抱してくれ。」

「大丈夫です・・・待ってられます。」

神田は莊山の話聞いて少し気が楽になった。

「その言葉を聞いて・・・安心したよ。」

莊山は、極秘に柿沼親子の捜査を続けていて発覚した事があった。だが莊山は仕事をいつもかなり熱心に行っていた事もあり、一ヶ月の仕事停止で済んだ。この行為から、莊山が神田を思う気持ち、そして心から悪を憎む心がある。

「じゃあ、また明日な。がんばってくれ。」

「・・・はい！」

神田は笑顔を作って莊山と別れた。

だがこの時莊山と神田は思いもしなかった。

お互い会う明日がもう来ないとは

次の日。第七麻奈森高校にもまた昼休みが来た。今36人中36人が教室にいる。

「今日はもつと多く持って来ただろうね。カ・ン・ダ・君。」

柿沼^{あくま}が神田に問いかける。だがその質問^{おどし}に神田はこう答えた。

「お金は・・・持ってきていない・・・。」

「・・・。」

神田は決意した。

「お金なんて、もう君に渡さない!」

もう脅しに乗らない。金など渡さない。莊山に言われたんだ。自分は生きる価値のある人間。強い人間だと。

柿沼はしばらく黙っていたそして・・・

「あつそ。」

そう言って、教室を出て行こうとした。

(え・・・)

この言葉は神田にとっても予想外だった。

「お、おい！何言っただよ柿沼！どうしてだよ！」

一緒にいた他の男子の一人が反論する。しかし柿沼はこう続けた。

「彼は、もうお金を渡さないと言っただ。だからだよ。」

そう言っただ柿沼は教室を出て行った。

(・・・・・・)

神田はしばらく頭の中が混乱していた。でもひとつわかったことがある。もうこれでいじめはなくなった。解放されたんだと・・・・。

放課後、神田は学校の5階・・・・つまり屋上にいた。

(莊山さん・・・・父さん・・・・母さん・・・・僕、もうこれでいじめには合わずに済んだよ。)

神田は死んだ父親、母親そして自分の事をいつも勇気づけてくれた莊山の事を思い出していた。

まさかこんなにもあっさりといじめが止むとは思わなかった。

神田は目をつぶった。そして、

神田は気が付いたら、体に激痛が走ると同時に地面に倒れていた。

「い・・・痛・・・」

顔を上げるとそこには、柿沼と他の男子がいた。そして柿沼がこう言った。

「まさか君がこんなにも馬鹿だとは思わなかったよ。」

そして、何回も、何回も、何回も。足で神田を踏みつける。

柿沼の顔は、いつものように笑ってはいない。その顔には殺意がこもっていた。

「君は虫ケラ以下で、ゴミで、屑で、本当に生きている価値ないよ。」

柿沼は殺意のこもった声でさらに顔までをも踏みつける。

「あつ・・・くつ・・・」

神田は声にならないうめき声を上げる。

「だいたい！君は何であの時生き残ったの！？何であの時、家族と一緒に死ななかったの！？」

神田は事故の時の事を言われた。

「君は生きている価値がないんだから、君の家族だって生きている価値がなかったんだ！だから死んだんだ！」

神田は、家族まで生きている価値がなかったと言われ、柿沼に対し

ての激しい怒りが込み上げてきた。そして自然に涙が出てくる。だが、今は何もできない。

「君がこの世に生きているなんておかしい！だから・・・」

そして柿沼はこう言った。

「僕がこの世から消してあげるよ。」

（えっ・・・！）

そして他の男子二人が、神田の腕をつかみ、無理やり屋上の先端まで連れて行く。

神田は必死に抵抗しようとするが、思うように体が動かない。

そして、あと一歩動いたら確実に落ちるといふところまで来てしまった。

「あっ・・・うっ・・・」

神田は下を見る。ここは5階。落ちたら確実に命はない。

「じゃあね。家族によろしくね。」

（そ・・・そんな・・・いやだ・・・）

柿沼はもう一度笑った。そして・・・

神田の背中を思いっきり押した。

何の抵抗も無く落ちていく神田の体。

神田の体が1階の地面に接した瞬間に辺りに大量の血しぶきが飛ぶ。

下で部活をやっていた女子達が悲鳴を上げる。

柿沼は、もう動かなくなった神田の体を微笑みながら手を振っていた・・・

この事件は、誤った転落事故として警察では処理された。

神田零の死体にはたくさんの殴られた後、そして蹴られた後もあり、なおかつ背中を押された後もあり明らかに柿沼裕也と他の男子の殺害と決まっていたが、柿沼は殺人まで権力でもみ消した。

さらに学校内では、

「神田なんて居なくなつてよかっただろ。」

「全くよ。あいつ頭も悪いし、運動もできないしほんとにキモかったわ。」

「神田零？なんだそんな奴この学校に居たっけ？」

「「「あははははは！」「」」

と、神田の死に悲しむ者は一人もいなかった。

そして、永遠に柿沼裕也が殺したとは世間には出なかった。だが・
・・

そこには、何もなかった。ただ延々と闇が広がっていた。

「・・・・・・」

そこに神田零は居た。だが彼の眼は生氣というものが感じられなかった。それはそうだ。一度死んだのだから。

「ククククク・・・一度死んで目覚めた気分はどうだ？」

誰かがそう問いながら神田に近づいてきた。

だがその誰かは、人間のような体の形をしていたが人間ではなかった。

機械のような白い体に、胸の中心に赤く太陽のような紋章が描かれていて、黄色と黒が混じった妙なベルトをつけており、腰の横には銃のようなものが取り付けられている。そして顔は十字架の中心が開いたような形で、紅く大きな複眼のような目があるという異形だった。

だが、神田はそんなのには驚きも恐怖もなかった。

「ダアレ？」

神田は消えそうな声で言った。

「クククク。驚きもせず質問を投げかけてきたか。さすが俺が選んだものだ。」

ナニカは、驚きもしない神田に関心しながら言った。

「俺の名前は・・・イクサだ。」

「イ・ク・サ？」

ナニカは、イクサと名乗った。

「ココハドコ？テンゴク？ソレトモジゴク？」

神田はイクサに再び質問をした。

「此処はな。天国でも地獄でもない場所なんだ。」

イクサはここは天国でも地獄でもないとは回答。そして、神田にこう言った。

「早速だがな、お前に生き返るチャンスをやろう。」

イクサは神田になんと生き返るチャンスをやると言った。

「ドウシテ？」

「はあゝ。また質問か。」

イクサは、神田の質問攻めに正直嫌気がさしていた。

「ドウシテナノ？イキテイルカチモナイボクヲ。ドウシテイキカエルチャンスナンテヤルノ？」

神田は光の無い眼から涙を流しながら聞いた。

「これは俺が思っていた以上の物だな。」

イクサは多少驚いた。だが質問には答えず、逆に質問をした。

「お前。人間を憎んでいるだろ？」

「・・・」

イクサの質問は、確実に的を得ていた。

「俺はな、お前を気に入ったんだよ。その人間への強い憎悪とお前の負の感情が。」

「・・・」

イクサは続ける。

「まあ、その負の心を作ったのはお前と同じ人間だな。」

「・・・」

イクサの言葉は再び大当たりだった。

「だからだ。」

どうやら単にイクサは神田を気に入ったかららしい。

「お前も随分と可哀想な奴だからな。家族も死んで、拳句の果てには全ての人間から拒絶されるんだから。正直ここから見えてさすがに俺も吐き気がしたぞ。そんな、人間を死ぬほど……いや、もう死んでいるか。凄く憎んでいるお前だったら、俺の力を操れるに違いない。」

「キミノ、チカラ？」

どうやらイクサは神田の事を此処から見学していたらしい。そして、神田はイクサが言う力という言葉に疑問を浮かべる。

「そうだ。俺の力だ。」

イクサは言った。

「俺がお前にこの力をやれば、お前はあの人間達に復讐こみクスが出来る。どうだ？俺の力、欲しくないか？」

イクサは自分の力を神田にあげれば、人間たちに復讐ができると断言。

だが、神田は……

「……イラナイ……。」

「はあ？」

神田はイクサの力を要らないと言った。

「フクシユウナンテ、イミナイ。ソンナコト、ソウヤマサンハノゾンデイナイ。」

神田は莊山がこんな事をやっても喜ばないと思った。実際にもそう
だ。

イクサは少し考え込んでいたが、やがてこのようなことを言った。

「・・・これを見てもか？」

そういつてイクサは指をパチンと鳴らした。すると床にあるビジョ
ンが映し出された。それには・・・

(！?)

雨に打たれ大量の血を流して倒れている莊山の姿があつた。流れて
いる血の量からしてもう莊山は生きてはいないことが分かる。

「ソウ・・・ヤマ・・・サン・・・？」

神田は目の前の光景に啞然としていた。

「どうしてこうなつたか、見せてやるよ。」

イクサは再び指を鳴らした。すると今度は同じところに違うビジョ
ンが映し出された。

そこには、とても真剣な顔をして誰かを睨んでいるまだ生きている
莊山の姿があった。そしてその誰かというのは、

柿沼だった。

「何があっても殺したことに変わりはないんだ。君は神田君を殺したことを認めるんだ！」

莊山が柿沼に怒鳴る。

ドーン

柿沼と莊山が居る場所に、その音は響き渡った。それと同時に莊山の胸から血が水のように流れていく。

そして、柿沼の手には黒い銃が握られていた。

「なっ……くっ……貴様……」

そう……柿沼が撃つたのだ。

「まさか、神田を人間扱いしている人間がまだいたとは思わなかったよ。まあ、生きている価値がない奴を生きている価値のある人間とと思っている奴も生きている価値がないってことだよ。」

「ぐっ……がっ……」

そして、莊山はその場に倒れやがて動かなくなった。

「はあ。まったく馬鹿な奴。フッフ……。」

そこから柿沼は立ち去っていた。

「……………」

そのビジョンを見て神田の眼から涙がさらに出てきた。

「え」と。今見たビジョンは、お前が死んでから約八時間後の出来事だ。」

さらにイクサは続ける。

「その。莊山って奴はお前が死んだのは柿沼のせいだって言うことが分かって柿沼に罪を認めるように説得を求めたらしい。が、どうやら柿沼ってやつは、そんなこと気にせずに莊山を殺したらしいな。」

「ソンナノ……。ウソダ……。」

神田はイクサの説明がとても信じられなかった。

「嘘じゃないさ。今、見たじゃないか。」

イクサはこれが真実だという事を強調した。

「まあ。人間は本当に。残酷で。卑劣で。心も腐りきっている、生

き物だつていう事が改めてわかっただろ？」

イクサは再び真実を言った。

「どうだ。お前の唯一の味方だった荘山が、同じ人間に殺されたんだぞ。これが最後だ。どうす……」

イクサは「どうする？」の「る」を言わなかった。

「クロス……」

もうすでに神田の答えが伝えられたからだ。

「ニンゲン。クロス！ニンゲン。イラナイ！ニンゲン。クロス！ニンゲン。イラナイ！ニンゲン。クロス！ニンゲン。イラナイ！ニンゲン。クロス！ニンゲン。イラナイ！ニンゲン。クロス！ニンゲン。イラナイ！クロス！」

神田は途切れることなく言った。

「あつ、ははははは！やっぱり俺が選んだ人間だよ！最高だ！」

イクサは神田の答えに高笑いながら言った。そして普通の声に戻って言った。

「よし。お前に力をやろう。人間に復讐する為の、『破壊』の力を！」

そう言ったと同時にその場からイクサと神田の姿は消えていた。

第七麻奈森高校に近づく人物・・・。

「殺す。」

その人物。神田零の腰には、あのイクサが付けていたベルトが巻きつけられていた。そして、腕にはナツクルのような機械が。

「殺す。」

R E A D Y

ナツクルのようなもののボタンを押す。

「殺す！」

ナツクルのようなものをベルトの中心部に入れる。そして・・・

F I S T O N

第七麻奈森高校の3年B組では、3時間目の授業が行われていた。もちろんその場に神田はいない。なのに、いつもと変わらない授業。その教室内に何かが入ってきた。その何かを見て3年B組の全員がキョトンとした。

「何だ貴様は？ここはコスプレ大会の会場じゃないんだぞ。今すぐ出て行きたまえ。」

神田を殴った教師が言う。

「あはははは！まったくよ！誰、あんた！」

「お前ばかじゃねえの！？ここは普通の高校だぜ！」

「『『『『そうだそうだ！』『』『』」

「『『『あははははは！』『』『』」

一人の女子が言うのと同時に、教室内の全員が笑いだす。

「本当にきみ誰？」

柿沼がも笑いながら聞く。

「だから、早く出て行きたま……」

教師が「え」を言う前に……

教師の頭に、深紅の花が咲いた。

そのナニカが、教師の頭を殴っただけだ。だが、それだけグチャリという音と同時に、周りに血液が飛び散り、脳味噌が飛び散り、そして、二つの目玉は原形をとどめない状態で床に落ちる。

「「「「「キヤアアアアアアア！」「」「」」」」」

教室に居る女子全員が悲鳴を上げる。

そして、何人かがその場から逃げ出そうとする。だが、ナニカは腰イクサにつけている銃イクサカリバーのようなもので逃げ出そうとする生徒たちの頭を目掛けて引き金を引く。

銃声音が轟くと同時に、逃げ出そうとした生徒たちの頭に銃弾が貫通。頭が血の噴水と化し絶命した。

さらに復讐鬼イクサは、銃を剣に変形させ近くの男子生徒の首に目掛けて振り落とした。

男子生徒の首が大量の血と同時に床に落ちる。

「「「「「ギヤアアアアアアアアア！」「」「」」」」」

悲鳴が大きくなる。

そして、その剣を手当たり次第に近くの人間に振り下ろす。

さらにイクサはベルトに取りつけてあるナツクルイクサナツクルのようなものを取り外し、他の人間の顔に向ける。ナツクルから炎がでる。

「ギヤアアアアアア！」

「熱い！熱いよおおおおお！」

人間達の顔が炎に包まれる。そのたびに人間達の顔が原形をとどめないほどに焼け焦げ絶命する。

教室内には大量の血液と、

グチャグチャになった臓器と、

原形をとどめていない人間の死体で埋まっていた。

そして・・・

「あっ・・・うっ・・・」

今生きている人間は、柿沼だけとなった。柿沼の顔は恐怖に染まっている。そんな柿沼にイクサはゆっくりと近づいていく。

「う、うわあああああああ！」

柿沼は恐怖のあまり、莊山の命を奪った銃でイクサに向けて乱射する。だが、

「・・・・・・・・」

イクサはそんなの気にもせず柿沼に近づき続ける。そして、

「あああああああああ！痛い！痛いよおおおおおおお

「おお！」

イクサは、柿沼の右腕に剣を突き刺した。

「なあ・・・僕が何したっていうんだよ！助けてくれよ！」

柿沼は、イクサに助けを求める。しかしイクサは聞く耳も持たずさらに、左腕に、右足に、左足に、剣を何回も突き刺す。そのたびに、大量の血が流れ、柿沼が悲鳴を上げる。

「なあ！助けてくれよ！助けてくれたら、金をいくらでも出す！だから本当に助けてくれよ！」

さらに柿沼は金をやるから助けてくれと要求。

「・・・・・・・・」

その言葉をつけてイクサの腕は止まる。

「わ、わかってくれるのか！よ、よし金を渡すから・・・」

グシャッ

ゴトッ

柿沼の声は続かなかった。

なぜなら、もう柿沼の首が床に落ちていたからだ。

もう教室内に生存者はいなかった。あるものは人間だったものだけ。

それなのに・・・

イクサは人間だったものの物体をさらに切り刻んだり、原形の残っているものの心臓や、頭を手で潰したりを続けたそして・・・

「クククククツ・・・アツハハハハハ！ハハハハハ！ハハハハハハ！」

たくさんの返り血を浴び、白い体が紅く染まった体で狂ったような笑い声を上げるイクサ。彼の笑い声は狂気に満ちていた。

その後、復讐鬼は第七麻奈森高校の全校生徒そして教師達合計1022人を皆殺しにした。

どの死体も、体が真っ二つになっている。腕と足が逆に取り付けられている。体が真黒に焼け焦げている。人間と人間の体の一部が入れ替わっている。臓器が辺りにグチャグチャになって転がっている。

中にはどれだけジクソーパーズル好きな人間でも、絶対に掛け合わせられないほど細切れになった人間の体もあった。

だがこの事件は、復讐の序章に過ぎない。

これからイクサも神田零は、人間達に復讐を続ける。

その度に、身体は汚れた血で染まっていく。

そして、狂気に満ちた笑い声をあげるのだった。

（後書き）

どうでしたか？

前半は人間の残酷さ、そして後半はほとんどグロです。

よくよく見たら、なんか中二病みたいな作品に・・・

みなさん。いじめはやめましょう。

この小説を見て面白かったと思う方は次回作。「SKULL 断罪者」をお楽しみに。

読んだ人は感想を是非お願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8320u/>

IXA フクシュウキ

2011年10月8日20時51分発行